閑卷驚奇俠客傳

編初

上

へ13
3156
4

橋源

開卷驚奇俠客傳第壹集卷之五

東都　曲亭主人編次

第九回　御士二人び癩病人に遇ふ　光棍初く舊悪を懺悔を

再説著演い那銅竿を索難て樵者と共侶に花水橋へ彼此と互く徘徊
もする程に高麗寺村の方よりして五六個の壯校と綱引這方へ投て牽
のそ来るに近づ隨ふよりそれい這壯校の別人るくきのふたの橋の上に仆れてありと人抱
あ。金一両を取せる。癩病病でありけれ亦復疑訝りて肚裏に思ひ原来彼れ
舊悪ありて囚れ狱繋ぎ窮疾ありて緯のうに及べるもん問ひ
そぶ中に相識るも一人ありて原是藤澤に程近き里人某乙が獨子そ小三郎
その父裏に他に両親の長に病着に生活の模りを失ひ朝の煙絶んとす折著演れ

米を取せ錢をえさせて両二箇艱苦を極めさせてあり。さて両親世を去りしかバ、その里に住
やうびんなく筆把る事の人もなけれバ、或人に媒せられて紅粉阪なる柳巷に赴き、彼方の書役
となりたるにて年来を經る程に。その時小正二ハ著演を見て遽しく走近づき腰を折めぐ
りて檀那久しくお絶なさりしが、よくぞ健にておはしましつる。こなたハ仔細ありて今朝も何
処へとて早く出させ給ひしと問れて著演ハ、けふハ昨ハ梅澤なる道家許赴きて、小夜
深ければ留られて今朝未明より還る折から、ふと聞くものありて、良く徘徊してのち和主のなる俺が
里長の噂に係るが、恙もなくて、よく愛て了就て詢ね一議あり。その杜佼ハ何かの故ある細
ゆゑ有て牽るる者ありて聊以ハかれが情由を具にもせず。這里迄も身を駐めしハ心つきたる所
からに從れど、その崖略を示しねかしと問れて小正二ハ後方を見かへり向せて、彼囚徒ハ目四郎と喚
做しな宿所不定の破落戸の、かれ此よりの庵花柳なる姿鏡屋の紅毫といふ遊女に馴染て
幾夜となくかよふ程に、賒になりぬる遊女の價の十四五金に及びしかど、償ふよしも皆ねバ、豫宿

所ハ徒々の里をとの鳩鬼をもて、かの噂もありたりしが、主人の堰て紅毫に絶てあはせざりしを、さ
やかに昨夜那奴が推て来て、遊女の古借を取せんに快く紅毫を出せとのゝしりしかバ、小主の見やりて
通すべしと催促せられて綴の圓金一両を取出て妓有に投與へしを左右なく受ざる推戻して
賒に拵られし金は寡ハ十四五両であるものを、その十が一ツにも足らぬをいかにせん、殘らず遣与
しあはねとありしも、果ぞ声をふり立て古借ハ其ほかへ家に取せん。且この金を受收めて快く紅毫に逢
せよといひしを妓有ののでら聴くべきやハ、云々と論ぜしかバ、目四郎大く罵狂ひて矢庭に妓有を
撻倒し、障子隔亮を蹴破りて、鄰坐席の盃盤さへに蹂み擲ちて、狼藉いふべうもあらねバ
あるじが人許ありて前後より組禁りて、縄を被て一夜さ戍をして、曉とともに然バ昨夜ハ在下も
それらのゝかに拘づらひて目睫もせず、文書を写ても、却鎌倉の問注所へ牽もてゆきて愁をうたへせ
許まうらんとて、那姿鏡屋の人々をとりかれ、互て黎明より出て、這里まで来つると辭せらしく
具ぐと著演ハ聞果て、原来彼目四郎とかいふ人、その杜佼ハ色にその身を持崩して。

人互くさぐーよう。俺が取せる金をそ。熟奴ふあらんとて。その禍を釀せーたる自業自得
とのいはるる。世ふ佳る白物のまたふーもあくだれが亦怪むふ足ーぢるる強盗密夫ーまたまるる
憐むべきのまるねるる。遊女ふ惑ひて債をおるる。漫ふ絆を惹ぎて。細られて訟の場に牽るい
不便之俺が那金を取せる。柳巷ふ赴くよるるまるて。縲絏の恥いあるまる。孫小人罪ーー
玉を抱いて罪ありとふ古語も似る。他がその復讐を受べきのまるが好意の還く
仇ふまるくるる。知るまい悔ーいるるもあくぜ。一旦極ひその人ぬるべ這異遺ぬるー今その縲
絏をるる。釋ぎ。仁と不仁と地と易て本意ふ違ん薄情さ又ふいるるのまるるーぢきのふ
送せーるる。銅筆を。迹を他い拾ふぎ。這義も向ふ。今一番極ふ水如とあく尋
思をまるるーいべ。小正二が云云と告るを送るく。空果ふ眉根を顰め嘆息しとの忽に図
いるぎ。大胆不敵の白物と佳いべ俺さま百正ーもるるとぬる。他いるが妻ふ使れる。針
妾の獨子まるるる父ふ既ふ世を去てよるぬるぢとるるーーべ一稔宿所ふ召とて。且く使ひ試

たるーふ素よる。状宜ーるれば折々の教訓。その為と思ふとる。主を疎ま親を知
らぬ。遂ふ逐電をるる。他が母ふ苦ふ病ーを幾程もなく。別れるるふ後他い近郷ふ
在りと。噂ふ聞るるの。相見るる。五六七年。あるを。環るるのまるるーぢ。微せーる。
是を訟の場ふ牽る。縁由を。問るふ有數ふ不便。他いともあれその親の末期ふ。
あれば極ふ人ふるまるる。欲を枉て俺們ふたなるふ。債の金いるるる。後日ふ俺們貰ふべー
その誘を。只管憑ひのまる。兼引れるべ幸ふるーんとのひ誘ふ慈善の辞を搗息しふ。
ぬ。小正二ふ頻るふ感ど。先より齊一停立る。衆人とるるるる。各位もるの大人の宣ふせー
ようを。望れるるん。這方ぬい藤澤ふ。福良長者でるるる。俺們が為ふ。人をるの
年来の慈悲善根。飢渇ふ通りー彼此人を極ひのひーいるぐるるーけん。一萬あるるる
髑髏を哀れるる。そをーも葬るるる。功徳を誰を知らぬ。人ふるるの目ふ。佳
佳の由縁あるるるれば。債の金を引うを。極ひるんと宣ふ。這義を。兼引るるるるを

衆皆うち笑て且驚き且歎び齊一進近つき。一箇々々に名告をして然る方ざまと知らざりしに大く丗礼を仕りぬ丸させるとうち賠話る。そ中に安鏡屋の主人に又恭しく著演にふうち對ひて既に笑せのふがごとく。昨夜這人の理不盡なりしを捨かねて仕舞

妨ふるりゆへ已とをゆるを鎌倉へ牽のとをんとつるわりをを大人の亦内に由縁あるとて亦

さをとゆふ和談に只這人の幸ひのことふあらばに亦俺們が歎び訴まれば綽果さを雑費もヨスく没るとをつまを名高ふ大人まをあらまれば後産疼きを心安ろ素より佳客

をうれども。ほれがとて月来の所ゆをとひねば債の金に後々きをゆれあるを様のひそ且本人を遮与ーまうらん。卿縛の縄を解きやと。縄とり男をいとそせば応と答てあるとうとの

組るを緩る程ふその餘のものもを怖ふて目四郎に被る縄をそが俱まく解ふけり。然程に自四郎にきのふ著演が取せる那金をとそ紅毫に會んとをゆ胸匹のををれば

支成らを勢に遂に已がをゆふ罵狂ひて細られ牽れてをきを来る程に又著演を撞見て

ゆうぞも抑留られ。昨夜のをを小正二が告る折に悔くも熱湯に古と焦せりへふ猶且醋と喫む心地に素よりを頼の癖者ゑれども人と生れて本然の善をゆふもわるきを恥て頭を擡ゆを既に著演に慈善の心始終違ゆ今その悪をを学くとへどもきの共

ゆをと露さを還て怖くゆに誘て又その縛縄を掠ひらが呆るをまゆふ慙愧と且感一且恐のをとゆふりもをるつゆをる登時著演に故意目四郎を睨へて這白物奴が年に長ともをを悪

心を改めを緩途をを遭ふてうとををへるを奴をゆれども汝が母のをを一ゆふて這面に拝ゆ

きをるを胆竜を納易て人ゆをるを後竟を可惜頭を喪れん応をせをゆふをゆとをを僅に

その意を悟り一目四郎に稍頭を擡て家公允さをを可重々一洗恩を忘てをを身を

責て佐と慎をゆん悔入てひをとゆふをとを著演に又衆人から對公和談の一條に

甲斐ありをとをを異ふ治りを歎びを亦優とを前をも既ゆをるを那奴が債の金

ちをを摧をを不盃盤を價を揣て贖ん翌豆俺宿所に訪れをを。その折金子を遮与をべと

ふを感ずる姿鏡屋の主人いとれを守まもおもてでその弟ふ及べば色を弱南沈情を賣て生活ふ出ずる妓院ふ行ぎるのタのつもあり況世上ふ隠れもなき大人の高義ふ羨ぎて心ふ損益を論ずべ。贖のタの思意ふ忘れぬ。皆共侶ふ向て宿所ふ送ふ出ずるとふ。娼賣柄ふ憚りあれど。這里ふ別れ難ふ礼を允しめられと受て答の美く繕ふ女ふ竹の節たるべき和談の口詛を小正二ふ及その餘のふも共侶ふ嘆賞て姿鏡屋の家公宜ふ小へ快罷らんとのぞて食恭く著演ふ告別ふ後者を辞ず。早く労を却目四郎を伴ふて遊ふ花水橋の茅ふ遊里雀ふ連立ぶ。著演ふ目送て既ふ遠くなりて又目四郎ふ向て對ひて。ふ似ずして汝ふ島許の白物ふその身の飢渇ふ堪難て身を投んとふ。虚言ふ奸智ふ長ずるとなる。十四五金の債あ。妓楼ふ登りて一両の金を慾ふ遂んとすふ最愚ふ所ふ。是より支を惹出て。竟ふ縲絏ふ及ぶ。ふの俺を欺ふ報ひとふ恨ふ。

俺ふ憐て重て汝を拯ふ。事情を知ふ。ふ見ふ説示さん俺料らずも這里ふ来て汝が昨夜の為体を守ふ及び悔ふ一両の金ふ惜ふ足らず。他ふ縲絏ふ衍て件の金を慾ふ取せ。ふ那金を取せ。他ふ債ある青楼ふ登て。他ふ妓院を開て細られて牽ふ衍ふ起て。ふ極ふ非を補ふ據ふ。ふの這一條のみ。ふ諾ふ宿所ふ来て立て藤澤ふ還ふ程ふ目四郎ふ今ふ初て夢の覚るごとく洪恩義感服て何容々として従ふ。却説野上著演ふ賜て宿所ふ還著て。且従者を休ふ猛可ふ奴婢ふ吩咐て目四郎を玄関の次の編室ふ召陟て。早飲ふ。程ふその身ふ奥ふ退て。頃て又出て来。却目四郎ふ對ひて。ふ汝ふ諾ふ。ふ有ふ。ふ別ふ。ふ。ふ沒ず倒れ。折俺従者ふ抱て茶を飲せんとて。ふ歯を噬締て受ざ。ふ挿る銅笄を。聊口を開て。繕ふ紛まて

上の巻を山ばいちやうより
花水橋悪木遇春
目四郎

あんのぶ
小正三
有像第十

取送せ。欲しく候所へ果て刀を帶ふ銅笄ゆゑ。抑件の銅笄は俺親の遺愛の品。家の紋を附られまゐ最惜とのミ思ふよう。今朝未明に立出て花水橋を徘徊し居く汝に遭ひしも這所以那折汝に延ふ殘りてゐる。在りければ俺が銅笄を拾ひ一とのあるべく然るに返せかといはれて目四郎些も驚ぎ。現宜いまるとく。那銅笄は俺に

あり。そを拾ひ得あらぬと詭計よりて竊を一徒のこのゆゑ憎しとも惡き飽き思はれ今は何を匿むべき在下は君の仇きのふまぢは不測の罪に陷んと謨りしかども。その人をたちその言を。聞てを高名虚しかる大德仁義の長者に恥て稍悪念を轉じその大阨を告むやと思ふのあらん今は隱せん術もなき難義あり。あれらの情由は一朝に說果べくもあらぬ

るに這里のあり端近く乾淨れる所を意中を盡しまうさん欲とふる著演領ぬく。

余らが俺と共侶に這方へ來よと先に立て庭を隔て離舍へ伴ひて坐を占れ目四郎障子を引閉て衣領の間に隱しる。那銅笄を取出して。膝を找め声を低めて

這銅笄を竊まーに。深き意味ありとまうす。次に願ふ收めまうさん。

ば返を著演。徐に取て引とりて故のごとく刀の挿て却目四郎に告んとせしに。甚

慶と訊ぬ目四郎。驚き嗟嘆して且俺うへより告まうさんとおもふ。

くとも宅へ在下原は假名川の客店肝八と喚れ。獨子でありしの故に世の人は

今に至て在下を客店の目四と喚候たり。年十五六の比より這身の悪に稍耽し。

良友に引入られ賭博に耽り遊女に惑ひて親の東西を喪ふと義理に限りて

れ勘當せられて一稔の賭銭友人と親に頼て其冬寓て。

母を賺して錢を借り衣をも借りて皆賭博に失ひしも。

敗れ。母を歳あり後に母も中垣に樹てつもくを着れ日来の悪に稍増して

不如と尋思て二親の外に出て中者稱を折を張り背門より潛入て

逗留の旅人とおぼしき夫婦と又その三人の男子に病歸して何かの

這のごとく竊聞せしに、その比底倉にて皷まれる脇屋少将義隆の家臣なる他们が子なりともく携へ來つる小六とよぶ総角は主の義隆が子なりけり。その時具に譲られし徒而伴しつ名を譲りて遂言して、袂に包める短刀と巻軸などを両三種妻に示して、倶して藤澤に赴けり。那御に隠れるなる野上史著演へ、かが少かりし時義を結ぶ異姓の兄弟なるぞ、その左も右もして養れん。その餘の事は條々とかの戸細りて昔しけめ字すめ措たる一封の書を筒を取出して遞与せしかば、妻は頻りふう泣て口説立てる哀傷悲歎を竊めて隨に氣の毒ぞ滅入るも竊心も耳くは耗て忙然たりし折、外面に人の足音して與りて來ぬるは俺親と看着られども、共に東西も知らず尽に鈍くも逃て親品の宿に避あり。本意ならぬ那旅客がものつるを左ま右さま思惟るに、巻軸は脇屋の系圖、又短刀は菊一文字と名づけたる重宝なり。又一種は何やらんしけれど袂に捲れてありけれど知らしうずけれど、巻軸と短刀は新田の餘類の證据なり。那落人们を鎌倉へ許訴さば身も濡ぎ。

許多の賞銭を賜るべし。あらばあれども俺親の宿せし只今許ていかが、親も亦落人を留措たる咎を受ん。然ども外聞妙からず、且藤澤へ遣して後許訴すべしと尋思をなして、日を過して縡の便宜を覗ひしに、那病人は館大六英直と喚れしものにて、幾程もなく身まかりければ、妻の母屋と申さんが小六と倶に柩を成して、大人を憑みて這御へ來ぬるけんは、縡の趣も又英直の柩を遊行寺へとて丁寧に葬せしかば、為体の送る迄も安からず。その時ぞそのせんと思ふ心で親品に告て竊に相譚ひしに、親品も聞て従がたし。和主がその志は俺们は博徒でも人に侠者といはるる這身の栄ある此の賞銭を求んや。海道一の侠者なる野上の翁を其落人们と有一罪なる害となれば、世の豪俠に誹べし。然とも和主は賞銭の欲しさのために訴んとおもふは禁めかねつけんの暇計を除く。児の好を離れて六御盜西魏姑峯より東で飯の喰ぬ後悔すると宥められて思ひ留りぬ。這親品は堂町の猪子太と喚れる豪傑で、惜むべし年来

脾胃を破られ吐血し身まうたの然程に親肝八名その次の年の夏五月時疫を犯され
病に絶ふ一旬あまり醫師も半分を伐ひけんに学を返すが如く劇しうなり
その病中に里人の俺二親に勘當の賠話しと這身を召へされ親の経営に結果
嗣て主人はまりてれども持崩せし身を尽に浮る心を改めれば僅に二稔ばかりの程に
家庫も沽却し裏家住ひの中に母親も亦身まうけりその初七日に蔵開草
集めの數多く家材を送る敗鐵経紀に售る銭に月来の房銭の債に屋を推
当られて勘定の合点字號の質牌を借屋の柱に直生産残るに四十七文の假名川を立
退けとの鎌倉金澤いへば大磯小田原貌姑峰の湯本這里に半年那里に三月
同氣同病相憐む友をとるべに生活もせず閑鈔に浮世を言ふと五六稔ばかりの程而
今茲に相模の底倉人は身を寓せて両月あまりの程に日閑鈔に利を失ひ
債に贖に納所に窮心の復起りその進退を考へに折に相模の眼代の藤白隼人

正安同主の湯治の暇を賜りて底倉の浴室に民の膏腴を絞り富を任
せ酒宴遊興米呂に倣ひ由断ならぬ山猟造化に宜しかれ
と計校の准備を夜に紛れて件の旅館に潜近つて垣を踰忍び入りて安同主の
臥房に赴き却彼此と極捞るに窃偷に孰ざる悲しかりしかども度を喪して傍に臥る
辟妾の足を蹴ふ踏ふ忽地覚て吐嗟と叫び声に驚き安同主倫見入りて呼
て岸破と起て引組む遮莫在下に小膂力あり相撲に聊嗜みに左右に組に伏
られて且く挑争に程に駭覚る近習の侍紙燭を乗て両三名に次の間に走せ
来て主を援け在下を毅倒し壓縛して柴新場に繋れ
戍卒二名側を去りて左右に程に天の明しを今かに斬られんと思へば生に心地せず後
悔の外なし果して庭に牽出されて命候間の厨下の家に立ありひるべ世の憂戈
今俺身ひとつに摘て疼痛を知られける浩処に安同主に対して刀を引提く坐席の縁

頬ふ出て来る。雑兵们ハ是を見て在下を又壺立て主の身邊ふ推居りを安同主熟
視て汝ハ原是何里のものぞ姓名宿所を具ふ言せ快々まうせのふぞと問れて在下
跪ひ。シハ在下ハ目四郎と唱れる一所不住の博徒ふ近曽ハ少も續ひ造化ふ付ハ
彼ゆも此ゆも引ずる債ハ苦しめられて。せん方のなき所ふ初て蜂起の夜捧ぶ。熟ハ抜き鉋
一文なりとも忽地生拘られ後悔腑を噬むまぶ。俺ハ俺身を恨るのみ。舊悪とハいへ
ども只ハあれ慈悲を願ひけれと。哪言ハ聞ず。陳せ。ハ安同主領ひて。ハ優ふ汝ハ力
量武藝も習ひ方とおぼ。ひ本支ハ昨夜ハ知れ領主の旅館へ憚りも学。潜び
入り。大胆不敵。免ぶ奴ハ。ねども。胆意ハ見ところあり。今ハ俺ハ徒ふ一箇の功を立
んと。ハ命を助るのみ。ぶ必重く用ハべ。胸を定ひ応ひ。とハ在下ハ怡悦ハ堪ぶ
何ハふハやらん。ハ思ひ。ハ今斬ハ。ぶ這首を續ひ御恩ハ預ハ非如水火の中へ
とも辞ふ。ハ命を約ふ勉て功を立ハんと快々仰付ハ。ぶ安

同主公ハ大ハ。ぶ雑兵们ハ云云と下知して躰を在下ハ。縄を解ひ召登りと飯を賜り
酒とも飲ひ更ふ閑室ふ召近つけて。ハ出ハ。ふ俺ハ年来の怨敵ハ此ハ是
藤澤ハ。郷士野上著演ハ縁故ハ箇様々と那人二度迄ハ身の為ハ恥辱を
攪ひ。辞の趣を送ハ。ぶ説示ひ。ハ相模ハ今俺ハ配下ハ。ぶ那奴ハ中絶ハ。ぶ舊家
を自由ふ。ぶ所ハ。ふ所ハ怨を隠ひ。ハ空ふ光明を過せハ。ふ圖ハ。ぶ辞を用ハ。ぶ汝
ハ。ふ。ハ。ぶ欲ハ。ぶ那里ふ赴ハ。ぶ段を以著演ハ。ぶ寝首を捕て俺ハ。ぶ賞禄を
望ふ任ハ。ぶ腹心ハ。ぶ家隷ハ。ぶ某ハ。ぶ事を行ハ。ぶ做損ハ。ぶ出ハ。ぶ免ハ。ぶ故ふ汝ハ。ぶ来ハ。ぶ這我を
ども那著演ハ武藝ハ。ぶ達人ハ。ぶ役類ハ。ぶ然を在下單身ハ。ぶ在下ハ。ぶ吟ハ。ぶ仰ハ。ぶ
正易ハ。ぶ優ハ。ぶ短ハ。ぶ奇ハ。ぶ妙ハ。ぶ一説ハ。ぶ安同主ハ。ぶ我を
亦甚ハ。ぶ妙計を問て在下此ハ。ぶ擬議せ殿ハ。ぶ知せハ。ぶ著演ハ。ぶ養嗣ふ

小六と呼ばる少年は曩に義隆の実子に在下故郷に在りし時故ありてこれを知れりその顛末は箇様なりと八年ほど九年前日前假名川の親肝の[illegible]
也英直がその妻母屋に送言をなす綜の趣系圖の巻軸菊一文字の短刀のまきをも
詳に其紀生にその比在下鎌倉に訴へさんとはかりしかども猪二太とかいふ親品諫やうもなく
黙止うとの義を以管領さまに告訴ふのうらみ著演親子は捕られ縛首成
刎らるべし這義にうと真実をも密談數刻に及びしかば安同王愛ろうべて扶ぶと大
かたうに原来野上著演奴は年来新田の荷擔し上を蔑ろ野心は顕然その義を
告訴まうんは罪ふれんの疑ひ雖然この拒障あり俺身今鎌倉に在ばれば速に
告訴まうて是一の拒障前月湯治の願ひよりそ五十日の暇を賜りしはまだ三十日も
過ぎざと鎌倉に還りがたう是二の拒障を持氏公は近比京都將軍と御不和に
竊に獨立の御宿意あるよりて新田楠の餘類とかいふも先非を改めて從ひ[illegible]思ひの

の徒々これあり徒れば今沒とのを鎌倉遣に藤澤なる郷士野上著演は竊に脇屋
義隆の子を舍藏て養嗣にしと具に訴稟にも正に證據あるはあるべし疑
是て遲滯せん是三の拒障なれの障礙を釋んとおもへば汝那宅に潛入て小六が所
持做す那巻軸と短刀を奪取て證據に著演親子を立地に陥
捕らるべきの人ゆゑ秘書宝刀を竊取るとあらべ心を盡ともるに入べし
亦復宜く手段を易て著演が弓箭則ち或は刀子刀等を竊取らば綜成るべ
將他が所藏と目識はいとよく妙なその東西既に入らば汝鎌倉へ[illegible]却
訴稟[illegible]野上著演は年来逆謀の企あり然るはより九年前の脇屋
義隆の子を舍藏て小六と名つけて養嗣にまうる某初はの義を知らず近曾那著
演と象棋の席に面會せしに交の淺からずして著演が竊に某を
招て譚ひ俺管領家を討滅して義隆のおん子小六丸を鎌倉の主にせんと欲和

殿に射芸鞍銃銃の達人でもあれば窃に鎌倉に赴き。管領家の名外出の折を覗ひ狙撃て素懐を遂ざるべかり。只一人の身を以数百騎の将を撃つるに矢砲飛剣に優るの子。這弓箭刀并に俺家の重宝と則和殿にまうらるる品とを管領家に捧げ捕めと其況て件の武器を贈らるる不吉なるぞの座を去らせ撃果さざる面目の勢籠ぐ矢えーが陽実一味の如く応て那里を出るとぞ尽に注進の為参上せりと実事あるに訴禀し。窃取るる弓箭また或に刀子刀并また辞の證据とて捉まるべ時を移さず著演が宿所へ討手を向られて那身はいかと闔宅の奴们一個も漏さず捕れて必獄舎に繋がれんぞ程に俺も亦鎌倉に還るまゐて詮議の席に列べ。その折著演宛在るとそのうだるに陳ずるとも俺亦智略を旋らして那奴に頭を喰はせざるべの隨に禀做し。叛逆の罪を定に竟に三族を夷げられて宿怨其然果さべ。と愉快なるぞ。勿論汝に忠誠の功を上るに賞銭を賜べ。俺も亦銭帛を書て。辛苦銭を

取べ。駝馬に荷の捷大役なれば念ず支を做損ぜざる努よ。と其況に金十両を賞に出。是に計議の雑費とて紙に拓りて貶ければ在下欲ず受戴て仰せるに必做課せばいん吉左右を俟せるべ。と言兼て旅舎に退るに且身皮に結び却平塚の相識許赴て這留て夜も日も這頭を徘徊て大人の宿所を張ると既に一旬許潜び入んと欲せ。かども内外の用心堅固なる竟に便りを得ず。他約の折を覗ひて刀子また刀并また窃んのみと機を易に。是より夜毎に暇あれば開鈔に耽り件の金を絶て三夜に失ひ。然に已べ。るるれば昨も朝より。に来て大人の他に変に。時に及び銅并とのそ。に聞れるに。造化手通麻慧使さの折に。銅并と倫窃に。偽而癲癇るに。飢渇に逼りて身を投んと欲せ。ものに。と母に実に。られ長者の教訓金二両を賜りに。導に違に慈悲善根天に。

別れてつくづと尋思し智を定め難て有れども又思ふ只一トこゝろの遺際ゆゑ銅葺を
のゝ穿鑿をなびそと鎌倉へとあれて安同主ふられーどく訴んと勿論なれども野上の谷を仇
とも知らで憐愍深く這金を本銭ふせよとて養られ恩ふ叛ぐ猪三太ふられーどく
友人ぐ暇計を除くとのひのわせんそを思ふ鎌倉罪ゑせんとてあれども然ども藤白殿
ゐも一旦命を助けられ雑費ふせよとて十両の金を賜りたのけれ今ゆら変易まぐうもあ
ぎいろふせまーと胸ふ手を當てゆてび尋思をせーふ又究竟のる段あり俺造化のよろーー
時紅粉坂るる姿鏡屋の紅竜許屋へ行て借る洞房銭ヨくあり這一両の金をそ
那里ゑ行て係ゑとゐぐ必これ彼と論ゑそ古借ゑ債られんそ折甚く罵狂ぐ那里の奴
們已とをゐぐ必俺身を絆てゐて鎌倉へ赴て憲法をたゝまるべ恁く問注所の詮
ぎ議ふ及ひでつゞ所持をる一両の金の出処を問れん時件の金ハ藤澤ゑ野上著演ゞ養
なるゑ那著演ハ箇様々々とゐふ至て藤白殿ふられーどくるべ立く誣て叛逆のよ一城

京さハ言不用意ふ出ゑ仇野上の角の恩ふも叛ぐ藤白殿ふ頼れる密謀立地ふ
成就せ然とゐハ姿鏡屋の許い外ふ方ゑ捉て牽れ俺ゞ絆ゑのこるこで
逆徒を告訴の抽賞ふ東西許ヨ賜るべ便是一事両全ゐハ優る手段ハあら
ゐと深念の腑を固めーとる紅粉坂ハ赴て形のごゝふ計ひふ豈思ゑ今朝も亦花水
橋の頭ふて仇ゑく大人ふ撞見て必ゑ因恩義を受んとゐ素より大人の侠氣ゑ世の風声
を知るとハいへども飽まで仁義ふ富めるる至誠善の長者ふ御座せ這身の不肖とゐハ
ゐゑ薄情や貪欲ふ相譚れて无実の罪ふ陥さんと仮倆一所ゑ行て悔けれ今俺身を
恨むも甲斐ゑ切ていハ大人ふ懺悔ゑ左も右もあらばやとゐふれの所容ゑと倶せ
ゑへまありゑ親ゑ不孝他ゑ不実の罪を思ふ放蕩ゑ頼三十餘年の非
是大人の高義大徳人の及ぶ誠心ふ感服せーふとゐて仕れば大人
ゑ百刎ま身を殺ー

…柱に觸れて頭を砕か…
呼禁めて。やよや等目四郎短慮ハ功なし。心を鎮めて坐に返れ性…
されバ目四郎僅かにかへりて。さて死ぬるも死なれざるとの声口隠る感激の目を屡瞬く
誠ハ袖に露けれて。我難く平伏なる著演頻りに歎息して。又目四郎を呼近づけ四下を
憚かりて声を潜めて。やよ目四郎。汝に優しき懺悔の趣。現薫蕙蘭を折るのハ。その芳が
らる芳しく。又韭葱を採るものハ。その身おのづから臭しといひけん古語にも似たる善悪反覆
濁を去りて清に従ふ汝が忠告。賞すべし。那安同が邪智毒悪。その奸計ハ今ぞ怕ぶべきに
足らねども。驚きにおいてハ小六が上への他ハ脇屋少将の忘れ子なりしといふよしをげにぞ。俺ハ知らざ
りき。他ハ則新田の餘類。舘大六英直が獨子なりと吟えしなる類を取て九ヶ年親と倣り
子とよりてなる俺すら知らぬ他が素生を。など汝に知られしハ。是禍の湧る所。那楊震が四知の
誠。壁に耳ある世なり。遮莫汝が忠告ハ。その甲斐なきにあらねども。言一トたび口より出てハ駟も追

かゝる小六が素生を安同に知られなバ。今はらにたち復されば。難義にて縦汝が管領家へよ
し訴ずとさばとも。安同帰府せバ告訴して。俺三族を滅さんと計らんなれバ。俺も亦時
なる命なれバ。辞まんよりもなほとなれど。小六を倶に罪なくて。六年來盡せし志の空花となるを
いかでせん。他ハ則英直が獨子なれバ。俺身と共に死ずも時運と諦めて思ひ絶るべきに堪もせん。
脇屋殿の忘子なりしと吟えしよくいと惜く。汝よりて俺も亦汝を用る所あり。死を禁めしハ
其の所以ぞ。絆のいまだ起らぬ間に便宜に任し小六を躱して伊勢の神戸へ落し遣はさバ。伊
勢の国司北畠左中将親能卿ハ父祖の時南帝の外戚なれバ人望重く南北両朝ん
和睦の後足利家に従ふて名を満泰と改めぬ然けれども南朝の聖恩を今更に忘れ
ず人も知れたれバ小六が世を潜ぶに便宜よき所。又小六も既に武藝に長て思慮も敢
ありと見ゆれども尚十七の少年ぞ。那身一箇を手放て落し遣りなバ長き旅宿にいかゞ不便よ
…隷随ひて那地に到て仕へなバ。死ずるに捷て義士といはれん甚麼遠謀ならん

叙と胸の秘事うち諦て。いと丁寧に説示せバ目四郎ハ歎びて。それハいと易き御
用なれ非如異国の盡処までも今郎のお伴して。苦しみを分ち切ての報恩謝也にかへ
途の日の定らざるなれバ指揮を願ふのミ。ゆゑに著演領きて。今ハ汝ハ平塚なる宿に退
きて便を等小六とともに認らばやと向を目四郎ハ東も不在ハ目ゑ被りと那藤白の密談に
よりて其のほまでも這里の内外も張済せらるれバ。気容貌さへ声音さへいとよく諦りて休息夜
をも街ふハいとのまに著演又領きて懐なる鼻紙刺の異宜代衣をうち開きて有つる金三
両を取出しつゝ目四郎に與へて又示しけるは。汝ハ且這金をもて。笠脚絆腰刀雨衣までも買整て
旅装して小六を俟ね時日ハまだ卜ゐがたし。又後に知らるべし快々立ねと急せバ目四
郎ハ件の金を戴き収め後日を契りて告別し平塚なる旅舎を投て退りけり。

第十回　相摸川に小六横死を示し　遊行寺に著演頻伽を葬る

館小六ハ這朝例のごとく疾起て。奴婢之助に大学の句讀を授果し。比養父著演が
梅澤より帰りきて還り来にけれバ。遽しく出迎て恙なきを祝し。路の疲労を問慰めて倶に
早飯を食けるに著演ハ容あらためて。せはしく箸を閣きて大玄関の方に出りて小六を親て生
平にあらぬ慌しさを訝りて來ぬる客ハ誰なるらんと身のめぐらうち出てより向ひてまづぞ待
書齋に退きしに猛可に胸のうち騒ぐれて何となく欝悶結れし気を索きさんとおもひて徐に庭に
立出てひとり彼此と見亘すに離舎の縁頬の頭に開し鬼花の笆籬邑も真白に亭ましに。
最盛りなりけれバ耳く其処に彳立む程に那密談の縡の趣目四郎が懺悔の忠告及び著
演が答し一言の首より尾までも圖らずも感労果て或ハ驚き或ハ憂ひて竊に書齋へ退き
つ獨熟思ふやう那目四郎とふものハ島許の癖者なるに奇々檮杌の取るよしなきも大人の惹む
善に感悟して鴆毒を還して良薬になりしも至誠の致すところなり今まで乃ふ大人の徳にそ
有がたけれ然るにても去歳の秋まで俺まだ知らずなりける俺身の素生を目四郎は知らるゝと

たれども世の洩さざるの九年の光陰を歴て親の仇を安同の告られるの鬼神の前知あるの時節到来竟の脱れぬ枉屈神の祟を今はらいぐわせん遊莫俺身の故に大罪を一生養父母の罪を知らざる自の亦何処へ立退くべき然とて倶の手を束ねて討手の為の捕れて親子齊一死んの益なし所詮主の破れ必先の那底倉なる安同が旅館へ獨居入て慶釜の做さるべき鎌倉武士の京家の安同なるを俺が素生を知りてのあることなれば禍頓の消滅して養家の悉なるべし然でも那奴の実父の讐と折るべし敷す果して先若亞将の霊をいかで慰めんと思ひ決めてありけるの亦時節到来の本意を遂ん嬉しきよ嬉しきよ那安同を撃ちべき所為なるを人の知らざるその科養家の及ぶべし俺が所為なるを敵世の人の知らざるの術のなくまぬと腹の問ひ肚の答時移るを諫慮を凝らもて子の憶断なるを思くの計なるべし夜霜の起出て牆を踰藪を潜て相模川の邊の来て彼此と見亘すの頃の夏の肇の月の中流のなるれば若葉の昼なる遠山の迎梅雨の水倍して流れの特のと速なる又只這方の岸邊の竹藪幾町狭繁て陸とも水とも分ぬを五六間伐開て野渡の船場の這頭の總て人煙稀の路津嵩師の孤屋あるのみ檐下の河原の亘三十竹可なる葛石幾箇の船俟人の立疲るの尻を掛さん為なるべし小六の其頭を得たりて舷く宿所の舊所より潜入てその身の臥房の赴く程の遊行寺の鐘音つ所を聴漏さずとも倦れば短夜なれども尚四更なり小六を倦ても枕の就て甲夜より准備なるけの袱包を又庭へ出て樹下なる石燈籠の内の隠して燈籠の小障子の故のごとく建られを知るのなるけの看官這袱包の内中なる何なるの東西ぞと尋るの菊一文字の短刀と那系圖の巻軸と金五十両のなるを這小六が出るの英直夫婦の正首の守りて俺身の携へ授けて父の送金いとの尽て二百両あるれば今より後俺が盤纏の医して及ぶれども倘底倉の戦殺せの那場の

鶴に騎て十萬貫を腰に巻ちとも亦何の益やあるに任れば多く遺し留めて養父母に贈り給べきの年来艱育の雑費の十が二三をも贖の寸志とする事しき金の盤纏に要るとて浮思とて形のごとく那二包の金を箇に分て百五十両を字紙に包み舊の如く衣箱の底に藏く送り措くべ間話休題却説小六がその詰朝生平の夢から起ても出ぎ守も知る人の名を声高に呼び立て或は罵ち笑ひ或は歌ひうち歎く千態萬状限りもなく立てゐる又うち臥て連に狂ふ騒しきに奴婢們は駭て呆惑ふく主人夫婦に報ずべ著演晩稲も亦驚き共侶に走り来て叱りても諭しても小六がいとど鎮まらず親子の分別なくて著演晩稲を疾視嗜りてひたすら罵り狂ふ中に傷痛に為体全く乱心と成るべ晩稲を怕て身邊へ寄らず著演とても埒あければ猛可に醫師を招ぎて容体を告て療治を請ひに小六を醫師を寄せ著演又甚く罵りを和解て脈を診んと

すれども小六ふと手を把らず矢庭に醫師を突倒し登り撫て剃立の頭を三四ッ撻ぶ醫師は吐嗟と叫び辛と逃退て著演別室に伴ふ賠詰く藥剤を請れる醫師は百會に唾を塗て衣領撥合苦笑して賢息の病体を是乱心に疑ひ倘狐の憑とぶ惱をも悪ぶ小六を狐妖顕るべ總て箇様の難病に良醫とふとも即効を奏ぶがたのめれど然とも治せぬとのあぐ只看病を専要なれ賢息は幼年より習讀書に氣を屈ぬ故にやうん痼症の人年久く心を労されば這病あり是を用ひて試ぬと密に醫按を演て湯液五貼調合せ遽に飲ぬ強て薦んと欲れば拂退け皆うち滅と醫療徒事にあらず著演深くうち歎て鎌倉の名僧験者に祈禱を請ひ加持を求て心を盡すもあれど小六を夜も日も罵狂ひて逃れば外面に走り出んとすけを看病の僮僕們辛と捉禁め横うち被

せく壓鎮めも幾番とかとあるぞあの故か著演の日夜看病の人を增し其の身も
勢を廢ぬる迫の間なく時々看とりけり左右する程なれや五六日を経ぬれば六が狂乱
稍鎮りて飯と咏ふと數椀ふ及ぶ著演晩稲八あの為体ふ聊安堵の思ひと做し
病苦の可否を省るまに小六も絶て応をせざるを仮箸と投捨て仰反てあ臥へ高
鼾と久く覚ざ徒而這日も暮しかと小六も亦も熟睡と快氣ふそなりぬ是則加
持祈禱の法驗ふよりのあらんとて三親の狹びいへばらく看病の奴婢们相賀と懈
るとあるあれども夫の五六夜の程の睡ると泡ざりーふ只今宵のこと静かなれぞ更あく
隨ふ皆ぞも各々睡眠を催して四睡の虎ふ鼾ぶ或猫児と膝ふ伸ば或背と
うち合と寂然とて目睡けり小六もそれを見済と窃ふ起く縁頰ふ戸尻枕用き
庭ふ出くふ夜石燈籠の内ふ隠措たる袱包をそ出と腰ふ附て足を後門ふ
赴て鎖探断て戸を蹴開て西を投て走りけ登時看病ふ侍りて奴婢们ふ小六が

後門を蹴開く音ふ驚覚く臥筵をそ小六をそ起ふ脱出ふけり赴よ駐
よと罵騒ぐ諸声ふ著演も晩稲奴婢之助も起て走りよりを空て看病の怠を成
外む迫暇ぞふる迫周章を著演急ふ推鎮めて無疑穿鑿時の根ら俺が門
前より東西ふ岐路特ふヨクふる部を定めて誰ら西の方又誰ら東の方
蕉火を走るふ便り食挑灯を携よ走るる狭快ふ自取も列ふ主命ふ誰
う此も擬議ぞ迫義ぬと応も果ぞ迫ぬとの安を挑燈を片るふ引提く裳と引折り
草鞋を穿ふ穿ふもあり十名ふ五の家僕们老僕小厮ふ至るまで數無を後
門より走り出路と分て喘々ぞ趕ける然程ふその夜丈小六を故意
暴ふ推開く西を投て走る既ふ一里ふ相模川の頭迫今八ぞ十
ぞ人もあるべ人ふ折ふ忽地後方ふ人音と趕来る両個の若党ふ
七と喚ふ做ふ弁一声を為り立てそを今郎ふ呼ぶ呼捉ふ

有像第五
画七

狂人不狂不狂人
還狂惑
小六
字六

む趕近着て小六を佶と見て原来追人い迫りて俺が九才の時ゑ一夢ゆ舞の趣
似て居る形此懲さぞい倒ゆ足ゆ貫縁ゆあるんぞうん点へば雲時停在て四んと近
つく字六が腕を右ゆ抓んで引肩被を行キと打と投すけ。修煉の巻法ゆ魂魄
ゆ苦と叫び声ゆ怯まで進む画七を左ゆ受て足を飛と礙と躓る躓られて
画七も云とだろゆ胸を反と倒れて小六を流れ来ゆ河原を投て走りあく影い
隈ゆ夜中の月ゆ光ても讀故一文不通の字六を膝まで横て立まく流れ猶痛む
あゆ歌画の何曾々々ゆ似て画七も頁ゆ山の腰を抜と野道ゆ跋ゆ能も両樹の坐
行松跋つゆ令郎ゆ噛々と呼被ゆ声を嗄と挙れ居て。然程ゆ館小六を又
只管ゆ走る程ゆ既ゆ相模川の頭まで来ゆけれい這路津場ゆ尻樹石の重
三三十行ゆ光を軽げゆ擡抱て岸ゆ繋ゆ渡船ゆ乗と無て件の石ゆ川へ
突と投捨て又引々と河原ゆ竹藪へ密と走り入と程ゆ所ゆ身を潜め趕ゆ人の

形迹を且く這里ゆ覗ゆ。浩処ゆ字六画七ゆ後れて来ゆ僮僕何ゆ連て
趕蒐ゆ皆路津場ゆ停立て隈ゆ月影ゆ且ゆ限ゆ彼此ゆ密と時眺
ゆ却ゆ。俺何ゆ投られゆ那里ゆ這里まで岐路ゆ跋ゆ何処へ行ゆ
見て渡船い這方の岸ゆ繋れゆ儘ゆ波濤を踏て流を渉ゆ仙人ゆ
ゆ前面へ赴ゆ人ゆ不思議ゆ思ゆ。
ゆ前面へ赴ゆ人ゆ不思議ゆ思ゆ。
ゆ彼孤屋を敲て起と。路津笛高師ゆ答ゆ萬一ゆ知ゆ
然ゆと躰と食共侶ゆ件の門邊ゆ立て連ゆ門を敲て時些ゆ問
俺何い狂人を趕蒐ゆ。今這川を西ゆ渡せ
ゆ噛々と呼覚ゆ裏面ゆ一声応と答て頃之と起出て戸を推開て
里の路津を成る翁ゆ衆人を左見右を各々問て言ゆ夜河ゆ渡ゆ地方ゆ法度を
犯と何人ゆ前面ゆ日暮て日今ゆ然ゆ言れゆ問て合ゆ今

より些一先つる俺門邉を慌ふ人の走る足音あるいは程ふ何ぞあらん
水音の交と雑えて余後へ異るものあらぬ各々ふ趕れるその狂人はあまりに
身を投ずるふあらぬやとのふは衆皆駭騒ぎて大変出来るとは什麼何処より
流れのけん迹なるぞと皆来て天よと罵る字六画七们と共ふ路津菅師さへ立ち
際ふ出るる月光ふるふ挑燈を喫ー添てそこら隈なく索ぬ繋ぎの船の内ふ庭草履
足あるぬ只これのみふあるぞと舷より船底まで濡せー水ぬ乾ぬ這光景ふ衆評斉一
ある這船より河中へ身を跳らせ遣られ時飛走水のやうん庭草履ふ目覚めの
是則那阿人の庭より這里まで穿めて来て脱捨られふ疑ふ来ぬとあるふ駭惜を
つくるもなく茫然と早河の水を眺て鴨立む程ふ著演を小六ぐるの心のと尾限るも
なければ小厮ふ挑燈点さて晩稲と共ふ這路筋の長ぬ畛を芋環の家ぬ尋
来る河原ふ評議を凝たる衆人をて声高ふそを字六画七们るぬ俺ふ只顧

小六ぐるの心ふ機りて堪られふ居て便りを俟んとより出てそなやと思ひめる。歎ぬ吾
妹子も倶ぬとふ林ふ入て出ても人ふ遭ざれば月明ぬ夜も子ぬあの間を迎てあまた来
るぞと云へば晩稲も目を拭ひてやよ字六よ画七们よりぬ小六ふ遭ざる欲と問ぬ夫婦共
倡ふ走そ近著ば衆人も皆応を為て左右ふ別れて立迎へるぞ中ふ字六画七ふ進を
出腰を折ぬあ家公暁ふけて奥さるもとくそ遥々来ぬ苦ぬるぞ今郎ハ
這川の水屑とあるぬ死ぬと報るを夫婦ふ涉果び胸を潰ふ声ふ雷ふ
知ふ放ぬ死ぬ生ぬ詳ふ告よふ字六画七ふ頭を撥ぬ
叱らぬふ略次の始末を知らぬ故ふ俺们両名ふ郷ふ南郷の頭ぬ今
郎ふ趕著まるぞ推留んとけるふの悍ぬ夜又のごく掻抓を引著て右と左ふ間ふ
立ぬ拍ぬ投ぬ起んぬ此彼俱ふ腰ふ抜く起んぬ足立ぬその間ふ今郎ふ這
方ふ投ぬ直走りふ走ぬ折ふ畑平畔藏们も後走ふ来ぬ報苦

痛を忍び共に趕蒐なり。這河原まで来たるに寂寞として人影もなく閑で這路津戍る分を連れに呼起して箇様々々と咨ーは夜河は渡る制度なれば明面渡せー人はなれど今より此ー先の程恁々のありけりと報られるに胸ら騒ぎ疑念の雲霧ざれば這分羽さへ相伴ふて游河原を彼此と索れもあるせられける果て分羽のいへる違ひは是南せ船の内は今郎の脱捨のひー庭草履半隻あり又舷より船底まで濡れ居れば是入水の時飛走水の撰ぶもるんされらふもて今郎は既に水屑まるのひ死とあり決めそはんと辞ひとく真実さらで報を受けが六日の昔蒲十日の菊まるふる晩稲いと声立て泣くを禁る著演が泣ぬ泣くを弥増て千萬無量の心の白長を赤る方もれりーを思ひ〳〵と声高ふ證跡分明るとて汝らが推量の違ひ〳〵ふあれども然がとてるを空くてらち眺めるに在ある縦小六を病病よりて不覚ふ入水をりとも。あの年来習ふる泅水は技あるのを萬さ一急流を凌ぐ前面渡せ扶介ぐと

て亡骸ふ渉猟らで空ふ已ぬ。這方の岸を竹藪のを見船を西の岸へ渡ーく。索ぶるを。敵国と路津笘師は推禁めそを宣ぶるを這早川は貌姑峯ろ。這方は類ヨヌ〳〵ふ志流でふ。ふ比の森雨を水岌毎ふ十倍を船尚自由を遣がるる。然はるるを申さんや佐々木梶原ありとも渉ぶるを推流さまく瞬間ふ幾十里ふ流されぬーふ疑ふ。とふを著演ぶるを介りとも後ぶまを送恨ふ為ふ。這僮僕は船ふ乗を前面渡ーふ案内を索られ憑ふ。俺は野上史と名告ぶ笘師は。ふ又一説を及ぶ原来慈悲の笘ある藤澤の大人でんせよふ這河原は遠ふ南御の地頭ふ央賃をあるんや食快乗せぬと。ねとふ衆皆ふ乗て主人夫婦が和を歩る小廝も俱を散動々と齊一船ふ乗ーぶ路津笘師は纜を解を棹を操を辛くも前面渡ーけ。著演を目送を晩稲と共ふ身邉ふ。葛石ふ尻を撰て那仏が還り来るまでとて立ち汐去ーを在りける程ふ晩稲を今宵看

病の奴婢ども由断をのひ歩く復る返を繰返を正木の葛根ハ絶て長死別れまるゝ孩を
人を恨をの悔吝愛惜唧言ハ果しなるゝを著演様め將ヘとそを又愚痴の諍言を知ら
ざを小六を総角よりそのの心様浪を事ども才も器量も千萬人ハ立捷りこれバとを文学武藝
両ども〻そのの妙奥ハ極めしハ必ひ〻ども狂乱の劇疾ハ犯されて逝て返ら返這河水ハ身を
論めハ前世の約束事でありけんか。今を諦せ那英真俺が年来の相識ども況
迭ハ義を結び。俱ハ異姓の兄弟ハ。ども〻ハ身ハおぼえを〻とるを英真臨
終ハ。その妻母屋ハ箇様〻〻とのひハ俺を頼ん為のをの故ハ英真が俺ハ與り一書簡ハ
一丁の字も寫されを咸素紙をもりーを事情を精をるハ英真年来俺が兼愛の趣を
他ども世ハ憑ーく必へども素より俺と一面の交りをけれ低〻とのひとるーのを故ハ只妻ハ
のを箇様〻〻とのひ誘へて妻と子を俺ハ寄をハ空緘る素紙をもをーいつが必よくその
意を猜し。辭へで需ハ応ぜ〻義気あるようを知れ。をの故ハ俺も亦その假言を真とを

渾家ハどもの機密を知らを。九ケ年心を盡なを。意中の情義ハ一夜共ハ芭蕉餅
とるーー感ハ渾家が獨悔〻と歎く唧言ハ千萬倍の慷慨ーを限りもあれど死生六命
ありを今ハ惜めども賢しを那英真ハ新田の餘類脇屋の家臣ども〻ハ俺初ども〻
ども〻を小六を英真夫婦の子ども〻是則その亡君義隆朝臣の乳子ども〻の義ども〻ハ
日ども〻俺もつやく知るーハ。ども〻ハ花水橋ども〻ハ破落戸が職悔ハよ
ども〻不憶這実説を〻ども〻那目四郎ハ九ケ年前。假名川の客店ハ。英真が病中を母屋ハ
送言せーを料らを竊聞を〻ども〻小六が素生を知らをとのひを介ハ當国の眼代ども
藤白隼人正安同ハ箇様〻〻のをとども〻年来俺と快らを心ハを磨ぐのをハ那目四
郎が悉〻の支ども〻ーー時安同ハ件の機密を告ーとを安同これハ便りを〻ども〻小六を
亦逆謀ども〻と讒訴。その宿怨を復さんと謀ると既ハ急然がを義ハ背を俺ども〻を
命を惜ん素ども〻野心を〻ども〻を禀解とも免れ〻ども〻それを〻ども〻小六を脇屋の公達

ゐるなと宣てゐいとくく。英直母屋の孤忠節操感ずるゐまるあるめ。俺身と倶は非命よ救ごづ。年来の博愛乳節も只這一事ゐ虚名とゐて死くい冥土黄泉を。英直夫婦ゐ何とゐん。絆のいまご起らゐ先ゐ小六を他郷へ落し遣らんとゐひかなのを。で生るゐいまご暇もあで入水の迹ゐたづ来し送憾ゐ言語ゆ筆ゆめを書れ多意思悲歎愛哀苦労の心裏いゐゐくん察しゆくとのひくゆ目を屡瞬く真実深意世ゐ又類ゆりぐ。情由を初て宣く晩稲いゐひけるやとだろゐ慰めくていとでゐ。夜川の水と堰こゐゆ涙のゐ瀬ゐゐけ。身の憂ゆゆや呉竹の苧敷ゐ久く躯ひる。小六を思ひ難父母の密談密意を洩ゐて且数ゐ心ひとゐふゐゐ。俺ゐ大人の侠と乳義ゆ即ゐ人の及ゐ所を今ゐゐゐゆゆとゐゐ。空緘ゐる素紙を受てその意ゐ悖ゐとゐく。素より知已のおゐちゐく。俺身と養ひ育ゐまゐゐ恩を共ゐ。父を分つとのひけ往古の游侠義士ゐゐ類字とれらのゐいゐゐ妹母ゐゐ。知らゐ只顧亡夫の義兄弟ゐとゐひゐゐ況や俺いけゐまゐの知ゐゐ

絶ゐゐゐゐ。ゐ又遺ゐ死別ゐ及ひ重死ゐゐゐ恩と情の縁由を外ながら聞く這身の薄命。実の親ゆも異ゐゐ九人年以来艱育の親ゐ一日も孝行らく仕へを治せゐ詭りの横死を示ゐ親と養父の仇を殺し那禍鬼ゐゐ禳ゐとゐいとゐ。いえゐいゐゐ苦ゐ死智ゐのゐゐゐゐゐゐゐ口説ゐ。嘗ゐ合ゐ伏拝めゐゐ影ゐ隠ゐゐ。竹の敏ゐ死ゐ下の拍ゐ届ゐ節も短夜のゐゐ暁ゐくゐゐゐゐ感涙の外ゐゐけゐ。渋ゐ字六画七ゐ衆人と共侶ゐ又船ゐゐ乗りて這方の河原ゐ漂ゐ来ゐ却著演ゐ報ゐゐ。仰付られゐゐく前面へ渡し部を定め陸ゐゐ水ゐ渉猟ゐゐ今郎の亡骸ゐ生骸ゐゐゐゐゐゐ又路津篙師ゐ著演晩稲ゐゐ対ひ。郷ゐゐ既ゐゐゐ如く母ゐ水ゐ高ゐれゐ石ゐ流ゐ早河ゐ身を投し人の亡骸を索ゐゐゐ益々深ゐゐゐゐゐとゐれゐ太意ゐ野上夫婦ゐ嘆息ゐ労ゐゐ。ゐ孫ゐゐ身を起せゐ明ゐゐれゐく横雲の間ゐゐゐ杜鵑冥土の鳥と宣ゐゐ。ゐ見ゐ頼む死天の旅ゐゐ残の月影ゐ共ゐ流る河水ゐ

河水の内にてかくれ忍ぶ
夫妻趕到夜向津
あらの
白石

丸
画士
畑平
像賛七条有像一十四貞
賛詩廿首作者所自題也

廻向の弥陀唱名親に無ごと子に數れ在りと知らば只竹の世の夏ごと見ひとの思ひ
べで形ゑ夢路を辿る心地と覚ぬ迷ひの夢るる涙ふ深ん雨神の未ど長手一紫
れる藤澤の宿所を投て衆人を俱と徐ふ還るけ。然程ふ著演ひとの次の日もつぎの日も
人を相模川の頭へ遣と小六が亡骸を索ひいども些の便宜もるるーが遂ふ見絶られ
ども里人们も亡骸を索得ずとの人知と小六が渡船ふ脱捨る草履の庭草履をぞ
伝ふ柩ふ斂め。菩提達麻ふの示寂の後棺内ふ半隻履の外なりたるの故事
なりふもいとで不樂ーるべ。依而著演い小六が亡せ。その夜る。第五日の昏昏件の空棺を
擡出させて。遊行寺へ送り遣せ程ふ藤澤南郷の里人はるる五里六里四方る。遠近村
落のあまねく傳へ笑話續ぞ。吊送せるるーが。然も廣ぬ遊行寺の本堂ふも
客殿ふも所狭きて聚合ー。三千餘名と記けり。這日の施主ふ野上奴婢之助と五六個の
所親ふ。道師并ふ大衆へ布施るども。英直母屋を安茅りー。時ふ一人心を用ひく。

法筵ぞで丁寧ー著演い那日ふ則嫡子の邑服を受て喪ふ篭りる程ふひとり心ふ
思ふ。小六を不慮ふ世を去りられる安同い意ふ飽ぎて。鎌倉ふ還るの後たるーで詭
詐と俺を亡さんとを謀らる。遂莫小六が在りぎるいとる怕るふ足ら絲ども倘接
宅ぎどせられん折ふる日四郎ふ笑てるー。脇屋の家譜と菊一文字の短刀と他ふ在ぬ
辨むるーくるる及べーぞ。隠さぬやと。ふ思ぞる。妻ふも告げぞ只ひとり。小六が子舎ふ赴
絶て。彼此と搔捞ふ然る東西絶てるーいがるく凝訝ぞ。鍵をたぐ衣箱をひらぞ。
内中ふる衣と中と在ふヨヌくら母屋が像見の衣ぞ。那い誰と這い某と小六が母ふ写
しる。紙牌を附るあり。登時著演ぞ。その衣い小六が母の服裳の折紀念ふぞ
奴婢们ふるら取せんと。隙ふ依禪做と。措けんのを痛ーぞ。その服裳ふ人
とるーー夢の跡筆の蹟さ。母も子も歎ぞ淡き紀念を合い空れと且るく高く隙も
あるべふ忘れられい愛惜の迷ひとぞと。胸ふの弱るるを奬と。涙れ彼と取ぞれば

字紙に包み金さしあて金子一百五十両家尊家母刀自と記し詳しく封じ
折ふて僕へ送る数も違はぬ什麼にこの金を小六に藏置けと疑ふのこゝろ
らまぬ。ゆゑ思惟るに英直の送金を艱苦の中に用ひも減さぬ幼君為
とて。その妻母屋に遁れ世に狡母屋も年来秘措ぬ身後に小六が兄弟七俺と晩稲
亡母親の紀念とて贈と思て記ふけん是をありひ彼を思へ忠臣義子の用意い
招別英直母屋に幼君の為に思ふことれを用ゆ。小六に恩と義の為に亦這金を
みづから用ゆ前後両度の安葬と并にその身を養育の恩に答る紀念金竟に
その身に要る東西とうぐを豫めを覚期の所為にあらぬとも蛇が知を
写送りけん十三言の送墨に寸壁年も繞に十七歳のあるも夏毛を一期とする。
筆の命毛短きに嗚乎義哉小六が用心噫嘻忠哉舘氏丈事に是主従
一對の賢才英智の幸ある天平命乎造物者の惜て年を奪ひ狡仕せ死

喪の憾良しかるとうちなく音ふてそろ夜鶴の子のふに感ふ親心堪に歎ふ
思へ人の眼包を拂ふて金を包み一枚の字紙を徐に引伸し。それ
只に習のやうに七これも元やと潟蔭よ
写しる見るにのこゝろの意中に吟じそれ則折句ゆ五七五七の句の上下に
脇屋義隆之子曽
ときやうたのとぞとふ一十言を措る
感ると早晩に出ぬもを額に加えて然に小六を名將の子孫ゆ俺が類嗣に
もふければ宿縁に羨て這筆遊に及ぶ那旦四郎が人つるとも是そ
這小六が詠草に名を助則と寫せ迺曽祖義助卿の諱の一字を取る今
必額髪を剃て佳字を彼と撰く名を花押を定させんと思へ初秋
まで母親の服中あれば黙止せに他ちを
悔ふ似れども名のを送て返ぬ人にけれが何せん紀念の金を感れ盃なると嘆

息の声い洩さぬ襖戸の板廚を安そう又推開て衣も金さへ舊の隨ふ衣箱ふ斂をく
るを限もなく又那家譜の巻軸と短刀を索ふ似る東西ぶ多うしかられの疑念
訝増し那目四郎が怪々とひつるい虚談秘然らぬ見たゞ徳一秘或ハ母屋ばば
をとろ人ふ〻くれんるを怕れ遠うも山の石室るどふ秘措しるふ〻ぐ秘ぬふのを
辟問んとまぐるけれが冬の山ふ杣木を摧ぬく花を求め夏の池ふ水を掬て氷の厚を揺ふ
似うるふ無ふと咳て却晩稲ふのを箇様〻と是等の辟の趣を真ふ耳ぬ示せ
ばば晩稲ハ少うち歎ぬく連りる袖を濡しる事情をまゞ知らぬ奴辨之助ものも
まとが小六ぐるを思ひつけて樹蔭をとして樂まぬ過ぬるを思ひ出ぬ親を泣ハ泣ませ童
蒙心もあるまとる。然程ふ館小六助則ハ相摸川原の竹藪蔭ふ晝を躲ま夜ハ
出ぬ密ぬふ彼此人の風声を探少くとも五六夕ふ及ぶ程ふ茅宿いふ六が七駄を索
得ずとの思ひ做し遊行寺へ安葬る。その辟の為体巷談街説異同多く既ふ正

ふ少えしを心安しと思ひ〻。竊ふ相摸川をうち渡して小田原の里ふ赴くあれら鄙ふ
宿所を狂ひ出ふ。その折の仆ふし臥被ひうを着るのを夜討の准備あると見れば
朝市ふけて骨董店ふ。故衣を買んとて彼此と渉猟る程ふ尚巳時可る。口吸草威の
身甲と薄鎌の甲手臑脛と長二尺三寸ある大刀さへ一口あり凡れい詰取て抜くるふ
銘ふれも夏ふ寒く。焼刃の匂微妙ふして露を含る朝の櫻の真盛るふ異るも
撃ば石をも辟く。良刀ふうんと思ひ〻ば衣共倶ふ件の武器を皆悉買とる人ふ
処ふ赴く。心ぢふ身を固めて所行ひとと想像るべ。菊一文字の短刀ふ件の大刀を
佩添て那巻軸ハ袱ふ包く腰ふ結着その嘿氏より潜るふ底倉を投てを程ふ
樹下暗紀麓路の脊の方ふ人ありてやよ盛野上の今郎佐寺せ〻と呼ひけり此ハ是甚
麼ふる人ぞ。其を編を續ぬ巻を易て第二集の簡端ふ解分るを聽ふ絲かし。

閑巻驚奇俠客傳第一集巻之五終

○曲亭翁新著俠客傳第一集畫者筆工剞劂人目次

有像一十七頁　江戸　溪齋英泉

浄書筆畊　江戸　谷金川

繡像剞劂　江戸　朝倉伊八　原喜知

全巻刊字　京都　井上治兵衛

俠客傳第二集　曲亭翁著　畫工右ニ同　全五巻

此本集ハ館小六助則が復讐の事より起りて楠姑摩姫の列傳に至る其間新奇絶妙の趣向最ヨヌろり第一集發販の後年内打續て出板遅滞なし

近世説美少年録　曲亭翁著

第一輯　第二輯　共ニ十巻ハ前年既ニ刊布し這番再刷

同第三輯　全五巻

今年の新版を製本既ニ出来右俠客傳第一集と同時ニ賣出し候

○家傳神女湯　第一婦人ちのみちの妙薬諸病ニよし世ニちのみちの妙薬多くありといへども此薬ハ功能すぐれたり　一包代百銅

○精製奇應丸　薬種をえらみせいほうをつまびらかにして其功能至てよし　大包代金弐朱　中包代壱匁五分　小包五分

○熊膽黑丸子　そのほかよろしき功能ありて其功妙なり　一包代五分

○婦人つぎ虫の妙薬　つぎ虫ハ産前産後ともに用ひてよし　一包代六十四文　半包代卅二文

製藥本家　江戸神田明神下同朋町東横丁　瀧澤氏

弘所　元飯田町中坂下南側よもの向　たきざわ氏

○古今無類なおしろい仙女香　一包四十八文

○黒あぶら美艶香　一包　文

江戸京橋南へ一丁目東側　坂本氏

天保三年壬辰正月吉日印發

江戸小傳馬町三町目　丁子屋平兵衛

大坂心齋橋筋博労町　河内屋茂兵衛